

—— 目 次 ——

日本で刊行された仏教関係叢書について 236
 〈配布資料〉 243
浄土宗の僧侶育成に使用されたテキストについて247

第5回 佛教図書館協会研修会 講演・講義録

平成16年6月30日 発行

当 番 校 大正大学附属図書館 〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨3-20-1

日本で刊行された仏教関係叢書について

大正大学人間学部仏教学科教授 木内 堯 央

木内 ご紹介いただきました木内でございます。日本の天台思想が私の専門でございます。そんなことで自分の使わせてもらっている書物の関係で、少しお話をさせていただきます。よろしくお願ひします。

お配りした資料は、日本で明治以降に刊行されている大蔵經、一切經と呼ばれているもののリストでございます。

きょう、なぜお話をお引き受けしたかと申しますと、今からおよそ三十年余り前のことですけれども、私が大正大学の大学院の修士課程に入ったころ、東京の大蔵出版という会社で『大正新脩大蔵經』が、再刊をすることになりました。当時、私の研究室には中国天台をご専門とする塩入良道先生がいらっしゃいまして、この先生が『大正新脩大蔵經』の編集主任として、大正大学とその出版社の一室とを行き来していらっしゃいました。私はその縁で、学資を稼ぐアルバイトにそこへ行くことになりまして、再刊の仕事を手伝わせていただいたということがありました。大学院が終わり、いろいろなことがありまして、途中で完成を見ずして、仕事としては辞めましたけれども、その後もいろいろ関係を持って、お手伝いをさせていただきました。今回は、そういった事業というものがどんなふうに行われていたか、そんなこともご披露しながら全体を見ていこうと思ったわけでございます。

それでは、日本における大蔵經の流れを簡単に辿ってみようと思ひます。

ご存じのとおり、奈良時代の天平の写經というのはたくさん残っております。当時は国

家事業の形で唐の国から入ってくるお經を、逐次、写經生を集めて書き写したのです。今、正倉院の文書に「写經司解」（写經司告）というものがたくさん残っております。紙がどのくらい必要であるとか、筆を何本とか、墨何丁とか、あるいはお給金とか、灯明の油をどのくらい欲しいとか、そういうことが書かれています。それを読むと、天平の写經の様子や経済的な状態までがわかります。

当時の日本では、仏教の叢書が輸入されると、全て書き写していくという事業が積極的に行われていました。現在も光明皇后や長屋王の名前の入った断簡とか、經疏がたくさん残っております。そういうところから一切經というものが始まっているわけです。

もう一つ、皆さんもご存じかもしれませんが、申し上げておきたいのは、唐の時代に智昇（總章元—開元28, AD668—740）という人がまとめました、『開元釋經錄』（唐開元18, AD730）という經錄のことです。その当時、仏教の全体にどのようなお經があるかわからない日本人が、中国へ行ってお經を持ってこようということになりますと、お經のリストである經錄が頼りなのです。中国へ行ったかたで有名なものでは興福寺の玄昉という人です。ああいう人たちが手に参考書として持っていたのが、この『開元釋經錄』なのです。そうしますと、これをチェックしながら、お經を集めるということになるのでしょう。

そういうわけで、天平、奈良時代と呼ばれている時代には、『開元釋經錄』の範囲のものしか持ってこないのです。この後にできた、『貞元新定釋教目錄』（唐代圓照著（貞元16,

AD800成]のほうなら出てくるというものを持ってこない。こういう現象が起きてしまいました。例えば、不空(神龍元一大暦9, AD705-774)の翻訳した膨大な密教の経典は中国にはあっても、日本にはほとんど入ってこない。奈良時代の仏教というのは、早く言うと『開元釋經錄』の仏教までなのです。そして、平安仏教になり弘法大師を初めとして、不空訳の密教の経典が膨大に輸入されるようになり、平安仏教が形成されることとなるのです。

ですから、こういう経録というものによって奈良仏教と平安仏教の性格が左右されたのではないかというところが、一つ気になっているところでございます。

そんなことがありまして、日本では一生懸命、お経を写そうとします。当然、南都七大寺(大安寺、薬師寺、元興寺、法隆寺、東大寺、興福寺、西大寺の七寺)、あるいは新興の天台宗比叡山延暦寺とか、そういうものがありますと、そこで坊さんが勉強をする、仏教を修行するために、お経が必要ということになりまして、一切経を写さなければならぬということになります。

一切経を写すという作業において、奈良の写経師という方々が活躍されて、あちこちの寺にスカウトされるということもありました。

もっと極端なことを言いますと、空海・最澄の文字というのはいい字だとか、王羲之がどうだとかと、書家の先生たちはいろいろおっしゃるのですけれども、これは素人目かもしれません、写経をしていた人たちの書体というのが一番参考になっているのではないかなと思ったりしております。そういうことで写経体とよく言われるような字形が固まってくるのも、こんな発端があるわけです。

当時は南都七大寺というものが国家の重要な仏教の拠点でありました。例えば、最澄が書物を持って帰りますと、それを必ず七つずつ写すことになっているのです。自分のところも含めて八つになるのでしょうか。写したものは七大寺に分ける。そういうことがそのころの決まりでした。

そういう状態にありましたものが、延暦寺・高野山金剛峯寺を初めとして新しい寺院

が数多く誕生していき、あるいは、定額寺と言われるような貴族の氏寺であったものが、国家的な保護を受ける正式のお寺になっていく。早く言えば得度者といましようか、お坊さんにする人を養成するようになると、もちろんそこにも一切経が欲しくなる。こういうことで日本の一切経というのはあちこちに写されて、所蔵されるようになります。

その一方で、写経のプロフェッショナルである写経生が活躍し、写経体の文字が生まれ、奈良で墨がたくさん製造されるようにもなりますし、あるいは紙が多くすかれるようになるでしょう。そういう文化的な波及効果はいっぱいあったわけです。ところが、一切経が一通りそろってしまくと、写経生に用がなくなってしまいます。しかし、新興のお寺さんが、新たに一切経をそろえようとするため、写経生の腕は生きていったわけです。九州や関東にまで写経生が移動していった形跡が見られます。

それから年代がたっていきますと、お経そのものに対する信仰というものが盛んになっていきます。例えば『日本霊異記』[景戒撰(弘仁頃成)]には、『法華経』を読んでいた人のどくろが落ちていたら、舌だけが腐らないでいたという話が残っています。

また、『法華経』というお経自体がそんなところがありまして、最後には日蓮上人が「南無妙法蓮華経」という経題を唱えるという信仰を集約されるように、お経そのものが、仏様と同じだ。もうちょっと言い方を変えますと、お経もいわゆるお釈迦様が説いて残されたもの、残されたお舍利、お骨に等しいものだと考えられます。実際に『法華経』を読んでいきますと、最初のほうにお舍利を大事にする、塔を立ててみんなでご供養をする、そういうことが出てまいります、そのうち、お舍利にとってかわってお経になるのです。

『妙法蓮華経(法華経)』というお経そのものが、残された影響力を持つものですから、仏様そのものと考えられまして、それにご供養をするということがお経の中で勧められているのです。

最近のことですが、比叡山の延暦寺に法華総持院東塔というものが寄進されました。そ

の落慶式のときに、『法華経』をみんなで書いて比叡山の東の多宝塔の中へ納めて、そのお経を供養するという形の法会が行われました。

そのときに、どういうことをやるかという、みんなが生きている仏様に差し上げるように、花やお香、あるいは食べ物、果物、お菓子などを捧げてお経の供養が行われるのです。

また写経自体を一つの供養の形式とする動きも生まれます。堀河天皇のころ、嘉保三年(1096)、坊さんと俗人、僧俗一人に手分けをして、一日で一切経を写させたというのです。その記録が、一切経供養の初めだと言われています。新しいお寺さんができたり、お寺さんが復興したりすると、お経が古くなっているから新しくするとか、ないから備えるということで、供養が行われました。

一方、印刷の歴史でも、日本の法隆寺の百万塔に陀羅尼を収めたもの(陀羅尼の入った高塔、小塔)が、日本の印刷術の最初みたいなふうで紹介されます。それから時代は下りますが、十二世紀の初めにお経を刊行しよう、刷って配ろうということも試みられたらしいということが言われております。やはり堀河天皇の康和四年(1102)三月に行われたという記録が残っております。

日本でこの一切経というものを本格的に印刷刊行したのは、有名な『天海版』です。上野に寛永寺をつくってもらった天台宗の天海(眩眼大師、AD1536-1643)というお坊さんが、家光の命を受け、一切経を刷ろうということになりまして『天海版』というものをつくります。その『天海版』というのは、これは木活字なのです。版木ではありませんから、一つ刷っては崩して、また字を並べかえて、植字をして、次を刷るといって大変な技術です。その一部は今でも残っています。刷り上がったものは寛永寺にあるということになっていますが、まだ実は、私は直接見ておりません。寛永十年(1633)から慶安四年(1651)、約十八年ほどかかって6423巻、部数で1453部刷られた、こういう数字が残っております。『天海版』の一切経というのが、そのような形で刊行されました。

その後は、『鐵眼版』(『黄檗版』)でございます。宇治の万福寺の経蔵に、鐵眼禅師(鐵眼道光、AD1630-1682)が改版した一切経がありますが、これは活字ではありませんで中国の『明版』です。『明版』の大蔵経をかぶせ版なんていうふうに申しますが、木の上へお経を貼ってしまって、彫ってつくったのです。そういう刷り方で『鐵眼版』と呼ばれているものがあります。

その『鐵眼版』は、幕末から明治にかけてまで仕事は続いていたようなのですが、『明版』のお経を裏返して貼ってそれを彫っていくという、復刻の仕方をしましたので、そのまま彫るわけです。ですから、『明版』に多少、文字の間違いがあっても、それは直らないわけです。

そこで、獅谷忍激(正保2-正徳元、AD1645-1711)という人が、この『鐵眼版』のままでは、校訂・対校をしていないので、残念だと考えました。せっかく日本で新しく、お経を流布するならば、きっちりとした対校をして、字を正して出したいと考えて、対校をして自分で校本をつくらうとされるのです。

その経緯を見ていきますと、1704年から1710年の宝永年間に、忍激上人が、『明版』と『高麗版』とを対校をします。『高麗版』というのも、実は手元になくて、京都の建仁寺にありました。その建仁寺の『高麗版』を見せてもらって、自分の手元にある『明版』と対校をしようと考えられたのですが、お経は大事なものですから、建仁寺はその『高麗版』を、経蔵の外へ出してはいけないというふうに断られるのです。そこで近衛家熙(寛文7-元文1、AD1667-1736)さんをお願いをして、建仁寺を説得してもらいまして、対校を果たすことが可能になりました。

もう一つのよりどころが、芝の増上寺にあります『高麗版』です。それも用いて対校いたしましたして、大勢の人を動員して全体にわたってそれを行いました。対校の作業が始まったのが宝永三年(1706)そして、宝永七年(1710)四月にそれが完成しました。

その後、明治十八年に増上寺の福田行誠大僧正が中心になられて、増上寺の『高麗版』を中心にして足りないところは『宋版』『元

版』を使って『大日本校訂縮刻大藏經』（『縮藏』）と呼ばれるものを作りました。その際に一番参考としたのは、忍徴さんの成果なのです。

しかし、まだ印刷の中で間違いが見えてきた、そういうのを全部、原本のわきに朱書きをしていきまして、今、大正大学がそれを全部持っています。

建仁寺の『高麗版』は、残念ながら、天保八年（1837）に火事で燃えてしまいまして、四十九巻しか残っていないというのです。逆に、忍徴さんのおかげで、それを反映したものが残っています。

中国のほうでは、唐の末、唐の時代に高麗のほうで改版された、『高麗版』が時代的には向こうで一番古いわけです。その後、宋、元、明で新しい版ができています。要するに古い版ですから、『高麗版』のほうに対校していくという必要がある。そういう姿勢が、この『縮刻大藏經』で成果としてでき上がった。

これは別の話ですけども、増上寺の『高麗版』は、家康が増上寺へ寄附したものです。その分量は6467巻という数字です。大和の忍辱山田城寺にもともとあったものを家康が自分の氏寺ですから、増上寺のほうへ寄附した。そういう経緯で増上寺のほうに『高麗版』があった。また忍徴はそれを作業の中で対校したということになるわけです。

また中国では、上海で、清の宣統三年（1911）。台湾では中華民国九年（1920）『頻伽藏』と呼ばれるものが復刻されております。

その後、『卍字藏經』と呼ばれるものが出版されます。これは京都の濱田竹坂さんが藏經書院を起こして、その仕事を始め、米田無諍という人が編纂に当たった。このときも、忍徴さんの『明版』の校訂と、建仁寺の『高麗版』とを対校したものを底本にして、『卍字藏經』として実現をしたということになります。

ここでは、いわゆるインド、中国、撰述に限って出しておりまして、それを補う形になりましたのが、次の『大日本續藏經』で、『卍續藏』、あるいは『續藏』と呼ばれているもので、これは前田慧雲先生と中野達慧先

生の成果であります。

『卍字藏經』に編入できず『卍續藏』に入れられたものはどんなものがあるかといえば、『鐵眼版』の中の「北藏續入經」という、後から加えられたもの。それから、密教の経軌、それから偽撰とされて入れられていなかったものなどです。ただ、語録はたくさんあるものですから、全部尽くせなかったようです。これが第一輯です。日本撰述による第二輯も企画され、いまだかつて、日本の人の書いたものが、一切経として編纂されていなかったものですから、何とかしようとするのですが果たすことはできませんでした。このとき中心になりました中野達慧先生が『日本大藏經』としてこれを刊行しました。

そして、『大正新脩大藏經』になるわけです。

約三十年ほど前に『大正新脩大藏經』は再刊されました。再刊の際に、我々は字が見えないところをどうしたかということ、一つは、前に出した『大正新脩大藏經』の旧版をもちろん見ました。旧版でも、難しい字、珍しい字は木活字なのです。木で彫って、植字をしてありまして、そのために活字の高さが高すぎて、濃くなって、周りが消えてしまったり、へこんで見えなかったり、そういうことがあった。

そこで割合、印刷のときに圧力がかかって、字が出やすい和紙で印刷した大藏經と、『縮刷藏經』、そんなところを見て、字の消えているところをみんな探し出しまして、そこへ今の新しい活字でもって、必要な字だけを白いきれいな紙に刷ってもらって、カッターで小さく切って、古い版に糊付けで張ったのです。鮮明にならないといけなくて、ちょっと割合を小さくしました。ですから、版面が前の『大正新脩大藏經』より新しいほうがちょっと、何%か小さくなっています。今、考えるとゾッとしますのは、相当、神経を使って、その指定された部分の字へ間違いなく張るようにしていましたが、正直言って、時々、間違っって貼ってあります。それが今、慚愧にたえないところですけども、そういうのがあります。

それより前に『大日本佛教全書』を復刻す

るという話が、「鈴木学術財団」で起こりました。『大日本佛教全書』はご存じのとおり、この最後の紙に書いてありますが、菊判なのですが、その鈴木財団の方たちが、『大正藏經』のほうの復刊の様子を見に来て、どうやらうかと考えて、『大正藏經』と同じ四六倍判といいたいまいしょうか、B5判といいたいまいしょうか、それにしておまおうとしまして、そして縦の字詰めは同じで、どんどん追い込んでいって、ああいう大きい判にしてしまったのです。

確かにお経としてはそれだけ見ていけば、それでいいのですけれども、私たちが困ったのは、古い『大日本佛教全書』で、論文の後ろに引用のページ数なんか書いておきますと、今度、新しいものではどこかわからなくなってしまう。新版のほうでは編成も少し変えたりしたものですから、どこに何があるかわからない。全部の目録を見なければわからないという状態になってしまいました。名著普及会さんがあつという間に旧版で出してくれたので、そのほうが使い良いということになったりしました。

『縮刷藏經』に入っているのだけれども、『大正新脩大藏經』に欠けているものがあります。これをなぜ抜いたのかというのが、だいぶあちこち見て、思い出してみようとしたのですけれども、全然手がかりがありません。随分大事そうなもの、大きいから抜いてしまったというものもありそうだし、日蓮上人のものが抜けたり、大きいものが抜けたりしております。これらのものは逆に言うと、『縮刷藏經』をお使いいただいたらいいと思います。

『大正新脩大藏經』の一番後ろの奥づけを見ていただきますと、正倉院の聖語藏だとか宮内庁だとか、あっちこっちへ分散して、みんなで行きまして、いろいろと対校をいたしまして、綿密にテキストをつくったことがわかります。編成も今までの編成とは異なり、高楠順次郎先生（慶應2－昭和20，AD1866－1945）や渡辺海旭先生の新しい仏教学の成果を取り入れた編成にもなりましたし、宗教大学（現大正大学）の矢吹慶輝先生が敦煌で収集されまして、大英博物館のほうにも

あります敦煌文献が、古逸部として編入されました。

それから、日本の部分が「続」として56巻から入っておりますが、この日本は少し不完全です。それを補うことができるのが『大日本佛教全書』だろうと思います。『大日本佛教全書』は望月信亨先生等が中心になって、『大正新脩大藏經』のほうの日本で欠けている史伝とか系譜とか、地誌とか寺誌とか日記とか、あるいは密教のものなどが収載されています。その点では、『大日本佛教全書』は大変な成果を上げました。

『大正新脩大藏經』には後に図像部がつけました。図像部には密教系の図像に関する叢書が入っております。『大日本佛教全書』も密教の図像系のもの、例えば『阿婆縛抄』[承證（元久2－弘安4，AD1205－1282）撰]であるとか『十巻抄』[恵什撰（？－保延元，AD9－1135）]であるとか、天台・真言の密教図像が入っております。それから、『大日本佛教全書』には、一つの日記のような形で、京都の青蓮院の『華頂要略』[本紀藤原爲善撰、藤原爲純増補、附録藤原爲純編（享保三－文化十一年）]が入っています。

こういう密教の図像のものというのは、本の中に入れてしまいますと、大変きれいにそろっているのです。しかし、実は、とりあえず巻数をつけていったところがあったりいたします。

他には、『大正新脩大藏經』の中に『溪嵐拾葉集』[光宗撰（慶長元－貞和3，AD1311－1348成）]というのがあります。真言宗の密教のものも、何種類かありまして、そういうものは全てお寺さんで実際に使っていた書物です。第一巻から一纏めにしてきれいに残っていたものは良いのですが、『阿婆縛抄』の場合には、滋賀県大津市の天台真盛宗西教寺の正教蔵と、比叡山延暦寺の蔵に散在しておりました。

そこで、岩田教圓という方が丹念にしわを伸ばしたり、よく検討して編成を見たりして、一纏めにしようと努力をされました。その努力のおかげで我々は、便利に使わせて頂いていますが、どうも怖いのは、それだけ一生懸命やってくださったのだけれども、必ずしも

その編成が正しいとは言い切れないということです。異本が出てくれば、そういったことに関する対校も進むでしょう。

それから、『溪嵐拾葉集』は百巻近くあるというのですけれども、数えてみると、百ありません。『大正新脩大藏經』を、こしらえるときは大変だったのでしょうかけれども、今、厳密に見ていきますと、日本のほうは、大変、任意にできております。

それから図像のほうも、悪い言葉で言えば片っ端から収載しようという意図が見られます。高野山大学の仏教美術の大家である小野玄妙先生が『大正新脩大藏經』の図像部をつくらうということでお始めになりました。印刷技術は活字版からオフセット版になりまして、非常にきれいですが、一生懸命収集された図像を全部、入れてしまおうということをされました。

『大正新脩大藏經』は、特に日本の部分が『大日本佛教全書』に頼る部分が多く、不完全な部分が多々あります。また、図像のほうも、これからいろいろな問題が出てくると思います。

亡くなられた佐和隆研先生が、もう一回校正しようと始められたのですけれども、始めてすぐお体を壊されて、お亡くなりになってしまいましたので、『大正新脩大藏經』の図像部というのが、どうもなかなかうまく活用されていません。今の新しい写真の技術をもって作り直したらいいだろうと佐和先生もおっしゃっていましたが、そういう時代でもあるのかもしれない。

話は戻りますが『大日本佛教全書』と『大正藏經』の図像に『華頂要略』というのが入っています。先ほど言いました京都の青蓮院の記録です。これもまた膨大なものでありまして、全部が調査しきれていないのだらうと思います。この『華頂要略』は、総論的な天台宗のそもそもからの流れのところだけが収載されていて、後半の一人ひとりのご門主の伝記のほうは載せられていません。その書目を選ばれた、心意気までいいわけですが、それぞれにまだやり残している仕事というのがありまして、まだ全体が完成したとは言えません。

そんなことで、『大日本佛教全書』のほうも、精力的に二十八部門、そろえているけれども、まだまだ十分ではない。ですから、今まで見てきた中で言うと、『大正新脩大藏經』が『縮刷藏經』にあって落としたものとか、今の『大日本佛教全書』や『大正藏經』の図像より先のところは、まだこれから、もっとやることはあるのかもしれない。経済的なことが一番ネックになるみたいですが、そういうものを乗り越えられたら、さらに進めることができるであろうと思います。

ここで皆さんにお勧めしたいのは、この頃だれも見てくださいませんが、『昭和法宝総目録』というものです。これは『大正新脩大藏經』と同じパターンで、3冊ございます。ここでは、『大正新脩大藏經』の底本と対校本の細かいところまで、どこは何と対校してあるということがわかる『勘同目録』というのが載せられています。

それから先ほど申しましたように、『大日本校訂大藏經』（『縮刷藏經』）を土台にして、『大正新脩大藏經』編纂の作業をしたわけですが、そのときに正倉院の聖語藏であるとか石山寺であるとか、各お寺さんのあらゆる蔵書とできる限り対校をしまりました。

その時に、それぞれのお寺さんの持っている蔵書目録、一切経目録と言われているものを集めて、『法寶目録』に並べてございます。目録があるだけで書物はないというの、残念ながら多少あるように思われますが、主なところの一切経の目録は、全部載っております。そんなところを見ていただくと、日本の漢文大藏經の全貌がわかってくると思います。

『大藏經』に加えて、その後、『弘法大師全集』、『傳教大師全集』などの、各宗の祖師の全集が続々と出ておりまして、最近では、書き下し文をつけた全集がだいぶ出るようになりました。

それから、各宗の全集ができていきます。最近の大きな成果とすれば、^{ななつでら}仏教大学が中心になって名古屋大須の七寺（稲園山七寺）の一切経の古逸經典を出されました。

「弘法大師全集」から始まって、いろいろなお祖師様等の全集がござりますが、これは

それぞれ編集の態度が違う。新旧ありまして、新しいほうですと、今の学生さんでも使い良い形のものでできておりますが、国文学、歴史学、仏教学の人など、それぞれのつくられたメンバーの内容によって少し力点が違ってきます。

例えば、多賀宗隼先生につくられた『慈圓集』という一冊のものがありますが、国文学のご専門の方なので、仏教系の著作というのは必ずしも全部載っているわけではない。そんなふうには全集というものも、いろいろ性格が違います。特に日本の方はまだまだこれから、やるべきことがたくさん残されています。

それから、各宗の全書というものがだいぶ出ておりまして、大抵の宗旨でまとめられております。天台宗のほうでは、『傳教大師全集』や『惠心僧都全集』といった比叡山で出したもの、それから、『智證大師全集』などの、『大日本佛教全書』そのまままで済ませてしまったものなどがあります。

あるいは、この『大正新脩大藏經』を初め、刊行されたものがたくさんありますので、その間を縫って、漏れているものを中心にして、『天台宗全書』というのが作られています。さらに、『続天台宗全書』として、大きいものを選んで25巻まで出しました。さらに続編が出る予定です。

それから、国訳は大東出版の『国訳一切経』が非常に網羅的ですが、その前に出ております『国訳大藏經』というものは、これは解題が大変参考になって、今でもその解題を拝見しないと先へ進まないようなところがあります。

それから、学生たちが便利だというのは、『昭和新纂国訳大藏經』です。これは総ルビでございます。質はともかくとして、読んでいくのには便利という形をしております。それから、大蔵出版で『新国訳大藏經』を今、刊行しておりますが、ご担当の方、それぞれで、国訳は質的にそろっていないようです。そういうところはちょっと残念だと思います。また、新しい研究が入っているという点でいいかなと思いますが、そっちまで及んでいないような場合も時々あったりしますので、残念な思いもします。

学生さんたちに仏教の叢書というときに、どの叢書の何がいかるところまで、考えて教えなければならないし、なるべく簡単に事を済ませようとする学生さんに、うまく対校してあるものまで目を配ってと指導することは、なかなか難しいんですが、現在努力しているところであります。

きょうは漢訳中心で申し上げましたが、ご存じのとおり、『南傳大藏經』というのがあります。これは昭和十年代に発刊されて、十八年ぐらゐまでかけてできたもので、底本はPTS、パーリテキストソサエティ（ロンドン）のパーリ語のローマナイズしたものから日本語に訳してくださったものです。しかし、昔の訳なものですから、いわゆる文語文で訳してありまして、なかなか読んでピンとこない。このごろ、駒沢の片山（一良）先生が口語訳をしていらっしゃるの、そういうのがいいと思います。

そういう『南傳大藏經』の部類も片山（一良）先生のもの中核にして、新しいものが欲しいでしょう。別に、『ジャータカ』だけは、中村元（明治45—平成11、AD1912—2000）先生が、『ジャータカ全集』というのをつくられましたので完璧かと思えます。

それから、チベットの文献は一般的に刊行して、日本で普及までいきませんが、各研究機関で購入できたものに、鈴木学術財団の『北京版』があります。あとは、東北大学や京都大学、あるいは本学〔大正大学〕で持っているものがありますが、刊行するというまでには、至っておりません。そちらのほうはこれからまだ開拓されていくのだらうと思えます。

私も一部分に偏った研究ですので、全般にうまく公平にわたらなかつたかもしれませんが、筋だけ頭に入れておいていただいたら、ありがたいと思えます。（拍手）

— 了 —

（校正：大正大学総合佛教研究所研究生 木内堯大）

〈 配付資料 〉

日本で刊行された仏教関係叢書について

I、大日本校訂縮刻大藏經 (縮刷藏經・縮藏)

菊判五号活字一段組、1頁20行45字 418冊 40帙 千字文順
 明治13年4月～明治18年7月 東京 「弘教書院」 島田番根・福田行誠ら主宰
 底本；増上寺所藏『高麗藏』、『宋藏』、『元藏』
 対校本；獅谷忍激校正『鐵眼版』、増上寺所藏『宋藏』、『元藏』

第一 經藏

大乘經	華嚴部	28部	233卷	方等部	363部	1133卷
	般若部	29部	747卷	法華部	14部	57卷
	涅槃部	16部	121卷			
小乘經		321部	778卷			
	合計	771部	2069卷			

第二 律藏

大乘律		30部	49卷	小乘律	71部	496卷
	合計	101部	545卷			

第三 論藏

大乘宗經論	93部	403卷	大乘釋經論	25部	180卷
大乘諸論釋	11部	77卷	小乘論	46部	722卷
印度撰述部	63部	167卷			
	合計	238部	1546卷		

第四 祕密藏

録内 (元祿年間黄檗印房開板)	187部	324卷			
録外 (豊山印刻 享保、享和年間)	111部	120卷	黄檗印房所刻	15部	17卷
			高野山所刻	3部	32卷
	靈雲寺所刻	4部	11卷		
	録外小計	133部	180卷		
閑藏知津方等部別出	250部	424卷			
	合計	570部	928卷		

第五 雜藏

支那撰述			論疏部	4部	28卷			
經疏部	44部	56卷						
懺悔部	12部	24卷						
諸宗部	三論宗	3部	8卷	法相宗	2部	12卷		
	天台宗	29部	131卷	淨土宗	5部	14卷		
	諸宗部小計	75部	616卷	華嚴宗	11部	17卷		
傳記部	16部	222卷	纂集部	6部	280卷	禪宗	25部	430卷
護教部	20部	156卷	目錄部	20部	179卷			
音義部	6部	170卷	序讚詩歌部	7部	120卷			
	支那撰述計	210部	2381卷					
日本撰述								
十宗	28部	65卷						
	総計	1918部	8539卷					

* 復刻 頻伽藏 (上海) 頻伽精舍刊 [(清) 宣統3年～民國9年] 四号活字一段組40帙

II、大日本校訂訓點大藏經

四六倍版 四号活字 二段組 1段 20行 22字詰め全 36套 (每套 10冊) 全 347冊 千字文順
 明治 35年 4月～明治 38年 4月 (京都) 藏教書院 濱田竹坂 (設置者) 米田無諍編纂
 底本; (京都) 法然院 獅谷忍激 黄檗版を建仁寺高麗藏 (北麓本) での対校の本 寶永 3～7年

1、經

①, 大乘經					
般若部	22部	711卷	寶積部	38部	174卷
華嚴部	26部	227卷	涅槃部	13部	103卷
五大外部			重譯經	252部	532卷
②, 小乘部					大集部 25部 155卷
阿含部	138部	369卷	單譯經	103部	242卷
③, 宋元入藏諸大小乘經				238部	509卷
④, 宋元入藏諸大小乘經之餘				62部	180卷
(①～④小計)			1084部	3570卷	單譯經 167部 368卷

2、律

①, 大乘律	26部	53卷
②, 小乘律	60部	465卷
(①～②小計)	86部	518卷

3、論

①, 大乘論	96部	525卷
②, 小乘論	37部	705卷
③, 宋元入藏諸論	23部	125卷
(①～③小計)	156部	1355卷

4、西土此土撰述

①, 西土聖賢選集	145部	279卷
②, 此土著述	154部	1360卷
(①～②小計)	299部	1639卷
(1～4総計)	1625部	7082卷

III、大日本續藏經 (卍續藏・續藏)

四六倍版 四号活字 二段組 1段 18行 22字詰め 全 150冊 (每套 5冊) 全 750冊
 明治 38年 4月～大正元年 11月完成 (京都) 藏教書院 前田慈雲会長 中野達慧編纂主任
 大日本校訂訓點大藏經の続補

第一輯

第一篇<印度撰述>

1, 經部	45部	120卷	2, 律部	6部	27卷
3, 論部	7部	45卷	4, 密經軌部	149部	186卷
5, 大小乘釋經部	466部	2296卷	6, 大小乘釋律部	76部	471卷
7, 大小乘釋論部	108卷	590卷	8, 諸宗著述部	13部	24卷
9, 禮懺部	4部	4卷			

第二篇<中國撰述>

甲 諸宗著述部	(三論宗、法相宗、天台宗、華嚴宗、眞言宗、戒律宗、淨土宗、禪宗、禪宗語録通宗、禪宗語録別集)	633部	1797卷		
乙 禮懺部		50部	152卷	史傳部	162部 1239卷
經部		11部	11卷	大小乘釋經部	1部 2卷
諸宗著述部		6部	13卷		

* 卍藏經に編入できず、卍續藏に入れられたもの

黄檗版中 — 北藏續入經

密教諸經軌

偽撰とされ未入藏のもの — (明續藏經のすべて)

觀世音菩薩往生淨土本緣經、十往生阿彌陀佛國經、淨慶三昧經、地藏菩薩發心因緣十王經、
大梵天王問佛決疑經、像法決疑經、など

禪宗語録類には省略あり

* 第二輯は予定されていたが、『日本大藏經』として刊行された。

IV、日本大藏經 (日藏)

菊判五号活字 20字17行2段 全48巻 34600頁

大正3年9月~9年3月 日本大藏經編纂會

會長 松本文三郎 編集長 中野達慧

版權は京都帝國大學文學科に在留

第一卷	華嚴部章疏一	13部	35巻	第二卷	華嚴部章疏二	1部	48巻
第三卷	三論宗章疏一	11部	28巻	第四卷	華嚴部章疏三	4部	10巻
	方等部章疏一	4部	19巻				
第五卷	三論宗章疏二	2部	3巻	第六卷	方等部章疏二	4部	14巻
	法相宗章疏一	9部	26巻				
第七卷	華嚴淨土論章疏一	4部	28巻	第八卷	曹洞宗章疏一	5部	108巻
第九卷	法相宗章疏二	24部	65巻	第十卷	方等部章疏三	7部	39巻
第十一卷	戒律宗章疏一	11部	29巻	第十二卷	方等部章疏四	3部	27巻
第十三卷	戒律宗章疏二	38部	50巻	第十四卷	眞言密教論章疏上	5部	42巻
第十五卷	戒律宗章疏三	13部	41巻	第十六卷	眞言密教論章疏下	11部	48巻
第十七卷	修驗道章疏一	60部	127巻	第十八卷	法華部章疏一	5部	35巻
第十九卷	大乘律章疏一	6部	24巻	第二十卷	三論章疏一	2部	7巻
第二十一卷	大乘律章疏二	4部	31巻	第二十二卷	大乘律章疏三	9部	39巻
第二十三卷	諸大乘論章疏	5部	22巻	第二十四卷	密教部章疏上一	18部	66巻
第二十五卷	方等部章疏五	6部	12巻	第二十六卷	密教部章疏上二	1部	85巻
第二十七卷	唯識論章疏一	1部	30巻	第二十八卷	法華部章疏二	20部	28巻
第二十九卷	三論章疏二	3部	3巻	第三十卷	法華部章疏三	1部	24巻
	掌珍智度宗論章疏	4部	11巻				
第三十一卷	理趣經釋章疏一	13部	50巻	第三十二卷	密教部章疏下一	6部	28巻
第三十三卷	唯識論章疏二	9部	21巻	第三十四卷	方等部章疏六	9部	26巻
第三十五卷	般若部章疏	23部	40巻	第三十六卷	密教部章疏下二	11部	30巻
第三十七卷	修驗道章疏二	43部	70巻	第三十八卷	修驗道章疏三	59部	65巻
第三十九卷	金七十論章疏・勝宗十句義論・六離合釋章疏	5部	26巻	第四十一卷	大乘律章疏三	6部	26巻
第四十卷	華嚴宗章疏下	5部	26巻	第四十三卷	天台宗密教章疏一	57部	64巻
第四十二卷	華嚴宗章疏下	26部	33巻	第四十五卷	天台宗顯教章疏一	30部	48巻
第四十四卷	天台宗密教章疏二	7部	36巻	第四十七卷	眞言宗事相章疏一	53部	70巻
第四十六卷	天台宗顯教章疏二	85部	99巻				
第四十八卷	眞言宗教相章疏一	24部	154巻				

総計 792部 2161巻

V、大正新脩大藏經 (大正藏經・正藏)

四六倍版 5号活字 3段組 1段17字29行

大正11年9月 (東京) 大正一切經刊行會

大正13年5月第一巻刊行~7年2月完成

都監 高楠順次郎 渡邊海旭 編集主幹 小野玄妙

阿含部	155部	390巻	本緣部	72部	334巻	般若部	43巻	777巻
法華部	17部	60巻	華嚴部	32部	254巻	寶積部	66部	303巻
涅槃部	23部	128巻	大集部	28部	184巻	經集部	451部	855巻
密教部	618部	965巻	律部	87部	515巻	釋經論部	32部	208巻
毘曇部	28部	659巻	中觀部	15部	53巻	瑜伽部	49部	288巻

論集部	66部	201卷	經疏部	111部	806卷	律疏部	12部	58卷
論疏部	35部	309卷	諸宗部	189部	647卷	史傳部	96部	565卷
事彙部	18部	315卷	外教部	9部	12卷	目錄部	42部	155卷
續經疏部	83部	541卷	續律疏部	3部	79卷	續論疏部	48部	506卷
續諸宗部	420部	1520卷	悉曇部	31部	62卷	古逸部	135部	158卷
疑似部	57部	63卷						

総計 3053部 11970巻

*縮刷藏經にあって、大正藏經に欠けているもの

大明仁孝皇后夢感佛説第一希有大功德經 2巻、大方廣佛華嚴經疏演義鈔 30巻(澄觀)、華嚴懸談會玄記 40巻(普瑞)、圓覺經略疏之鈔 25巻(宗密)、首楞嚴經義海 30巻(咸輝)、大佛頂首楞嚴經會解 20巻(惟則)、妙法蓮華經解 20巻(戒環)、修儀要旨 1巻(知禮)、肇論新疏游刃 3巻(文才)、華嚴原人論解 3巻(宗密)、華嚴七字經題法界觀三十門頌 2巻(本嵩)、始終心要 1巻(湛然)、天台四教儀集註 10巻(蒙潤)、宗門統要續宗 22巻(清茂)、禪宗正脈 20巻(如雲)、禪宗頌古聯珠通集 40巻(普會)、古尊宿語録 48巻(涓贖藏主)、天目中峰和尚語録 1巻(慈寂)、天童密雲禪師年譜 1巻(道忞)、大明三藏法數 50巻(一如)、教乘法數 40巻(圓澗)、御製祕藏註 30巻、同道遙詠 11巻、同緣識 5巻(太宗)、輔教篇 3巻(契嵩)、新編藏教音義瑞函録 30巻(可洪)、一切經音義 25巻(玄應)、新譯大方廣佛華嚴經音義 2巻(慧苑)、紹興重雕大藏音 3巻(処觀)、御製蓮華心和廻文偈頌 25巻(太宗)、等序讚詩歌部 7部 120巻、法華題目鈔、十法界明因果鈔、內證血脈鈔、十法界鈔、總勘文鈔、教機時國鈔、本門戒體鈔、立正觀鈔、受職功德鈔 各1巻(日蓮)

計 45部 675巻

*大正新脩大藏經に新たに編入されたのは、以上を差し引いて、1182部 4011巻

大正新脩大藏經 圖像部 12巻
昭和寶法目錄 3巻

VI、大日本佛教全書 (全佛・日佛全)

菊判洋装 5号活字 17行2段組 全150冊

明治44年9月 (東京)佛書刊行會 發足 高楠順次郎 大村西崖 編纂主任 望月信亨

大正元年5月～11年 刊行

28部門

目錄、總記、諸經、華嚴、法華、台密、眞言、悉曇、淨土、融通念佛、時宗、戒律、三論、法相、因明、俱舍、起信、禪宗、行事、宗論、史傳、補任、系譜、地誌、寺誌、日記、詞藻、雜

総計 953部 3396巻

第5回仏教図書館協会研修会

浄土宗の僧侶養成に使用されたテキスト
について

大正大学文学部史学科教授 宇高良哲

宇高 ただいまご紹介をいただきました大正大学の宇高と申します。

きょうは一応、あちらこちらに話が行ってしまうといけないと思いますし、それから、私が、所属をしていて、一番、間違いのない浄土宗の僧侶養成にかかわるテキストから話を入れていただきます。それだけではいろいろなお立場の方があろうかと思いましたが、最近、こんなような論文を書きました。お手元に資料として、これが行っていると申します。ここで例として取り上げるのは江戸時代でございますが、江戸時代に各宗が自派の僧侶の養成をどのようなシステムであつたかということについて、新しく、その「諸宗僧侶階級」という資料が出てまいりました。従来は一般的に「諸宗階級」という本がありまして、それに基づいて、それぞれの宗派の僧侶の養成はどうあつたかということが記されているのですが、1つ、新しい資料が出てまいりましたので、それを使います。

ちょっと成立の順序が、中の論文を読んでいただければわかると思うのですが、例えば抜き刷りの20ページのところ、そこに、下段のほうに「諸宗僧侶階級」と「諸宗階級」と2つの資料を比較をいたしております。それで、諸宗僧侶階級にはどの宗派の僧侶養成のシステムが書いてあるか、それから「諸宗階級」のほうにはどの宗派のシステムが出てくるか。もし、東西本願寺の方がいらっしゃったら、真宗の方がいらっしゃったら大変失礼でございます。どちらにも出てこないで、そちらのご宗旨の方には大変失礼なところがございまして、一応、これが各宗派から、江

戸幕府の寺社奉行に書き上げて、寺社奉行が記録にとどめた資料でございます。ですから、江戸幕府に提出した資料の写しでございますので、この段階では宗派ごとに書いていない。宗派が出して、それを寺社奉行が整理した。だから、同一基準で整理した資料ということでございますので、その中でそれぞれの宗派はどういうふうな僧侶養成のシステムをとつたかということをもとめたものを書きましたので、それを後々、参考にしていただければ、それぞれのお関係にあるお宗派はどうであつたのか。それを見ていただきますとすぐわかるのですが、宗派によって非常におのおの、まちまちでございます。決まりきつたものはない。比較的、浄土宗とか天台宗とか日蓮宗とかというのは、非常にシステムがきちっとしている。ところが、真言宗や他の宗派はどちらかということ、僧侶養成の学問的段階がよくわからない。どちらかといえば、実践の方に重きがあるのかなという風に理解しているのですけれども、あまり何をどういう順番でどう勉強しろということが出てこない宗派も正直に言っております。ただ、そういうことをこの小冊子を見ていきますれば、それぞれの宗派がどういうシステムであつたか、イコール、それに対応する形で江戸時代の僧侶養成のテキストは形成されている。手続を踏まれているわけでございますので、そのことを最初にお断りし、一番、私が日ごろから心がけている、その中の浄土宗を例に取り上げて、お話をさせていただきます。その考え方がそれぞれの宗派に、すべて通用するとは言いませんが、参考にしてお考えいた

だきたいということで、本来なら江戸時代全体の宗派のそれぞれの書物について、僧侶養成のテキストについて触れることが正しいかと思えますけれども、とりあえず、今言ったような経緯で、浄土宗を代表して少しお話をさせていただくということをお断りをさせていただきます。

話がちょっと、いきなり本論から入りかけましたが、その前に、私がどのようなことを考えて、どのような勉強をし、結果として、このようなことをどういうふうにして調べたかという話に入らせていただきます。ただいま中村部長（中村英信図書館部長）のほうからご紹介をいただきましたように、私は文学部の史学科に所属する教員でございます。たまたま、浄土宗の僧侶でございますので浄土宗のこともやりますが、私自身とすれば授業で教えているのは、近世の仏教史というよりは江戸初期の政治史みたいなことを専門にしております。結果として、そういうふうに仏教関係のこともかかわるようになってまいりましたけれども、できますれば、もう一つ、私が大学の授業体系とは別に、こんなふうな形で少しお役に立てないかと考えていることがございます。それぞれ、皆さん方、各宗派の図書館にいらっしゃる方なので、それぞれの宗派ごとに特殊なことがあると思うのですが、どうも仏教の言葉であるとか仏教の本であるとかというのは、なかなか一般の方にとって難解だ、わかりづらい。昔から、たくさんの資料がいろいろと残っております。それぞれの宗派の中の特殊な資料として使われているけれども、残念ながら一般の歴史の資料にまで、内容が難解である、特殊な資料であるということで、なかなか利用されていないという現状があると思っております。

そういうようなことがありますので、できれば各宗派の特殊な難解な資料を一般の方々に理解できるところまで整理して、資料を提供して、できれば仏教界にもこういうような資料があるので、ぜひ一般の歴史や一般の研究の世界でも、そういうものを利用していただきたい。古い、そういう特殊な資料を一般の方に理解できるところまで整理して提供をしたいというようなことを、もう一方では心

がけておまして、たくさん、あちらこちらのお寺に残されている特殊な資料を活字化して、皆さんに読んでいただけるように、理解していただけるように努めているというのを一つの目標にしてやっております。

そういうような過程の中で、必然的に皆さんの資料をしばしば調査をする、整理をするというような仕事の中で、こういう問題も避けて通れない。これからお話をいたしますけれども、浄土宗には檀林といまして、これはもう各宗派に檀林というのはある。いわゆる大学の前身に当たるもので、江戸時代に僧侶養成に当たった大きなお寺のことを檀林と言うわけですが、そこが資料なども一番たくさん残っております。当然、そういうところのお寺の資料の調査に行けば、こういう書籍類がたくさん残っているわけで、これを避けて通れないという過程の中で、必然的に身につけた知識なのでございますけれども、そういうものを少し私のわかる範囲で浄土宗を例にとりながら、整理してお話をさせていただきたいというふうに考えております。

では、まず、このパンフレットのほうから離れまして、きょう、お配りさせていただきました、こちらの資料のほうを見ながらお話を進めさせていただきます。ですから、たまたまお話しをするのは浄土宗だけでも、この話を応用していただければ、各宗派の僧侶養成システムのテキストに対応できるということを申し上げて、図書館のほうで今日、用意してくださったこの資料の「浄土宗関東十八檀林について」というところから入らせていただきます。

これはもう、天台宗でも日蓮宗でもどこの宗派でも、いわゆる表現はいろいろあると思いますが、檀林、いろいろな字が当たるのですけれども、よく書かれるのは、禪宗なんかでは梅檀林といって、それを省略して檀林と言ったり、いろいろなことを言うのですが、一般的に江戸時代になると、こっこの[檀林]が一般化しているようです。けれども、もっと古い、鎌倉から室町ぐらいたりの資料を見ていると、談議をする学林という言葉が詰めた談林ということのようでございますので、多くのお坊さんが集まって修行をし、

学問をする、談論をする場所というような意味ですから、本来は古い資料では談議所とか談林とか、この用語が出てきて、これが江戸時代になると梅檀林という言葉が一般化してきて、音で通用させて、こちらで。浄土宗なんかも室町期ぐらいまでの資料は、談林で出てきます。江戸時代でもまだ残っています。けれども、整理した形では檀林になってきます。どちらも、これは今申し上げましたように、多くのお坊さんが集まって学問修業に励む有力な寺ということでございます。これが浄土宗ばかりではなくて、日本の中世から江戸時代にかけては檀林といって、僧侶養成機関が各地に存在をしたと思っております。

これも一般論で申し上げますけれども、少なくとも、今、ここで私が申し上げようとしているのは、浄土宗の関東十八檀林というふうに関東で18ヵ所に限定した檀林を取り上げますけれども、これは江戸時代になってからこういう組織ができた。関東十八檀林というふうな組織というのは江戸時代になってからできたものであって、それ以前は僧侶の養成に関しては、もっと古い時代、古代は別で、私度僧とかそういう議論をするところは別にして、少なくとも私の頭の中にあるのは、鎌倉から室町ぐらいという形で、一般に国家の統制を受けない形で、各宗派がお坊さんを養成し始めた時代です。

前提はそこへ置きますけれども、その時代になってくると、それぞれのお寺で修業して、周りも、みんながお坊さんとして宗教行為ができて、お経が読めて、そういうことができれば、お坊さんという扱いになっていたと思うのですが、それは江戸時代という一つの幕藩体制の枠ができてきますと、江戸幕府にとって、まず必要以上にお坊さんがふえること、寺がふえることを幕府は絶対に望まなかった。それから、多くのお坊さんの中で、非常に勝手な行為をして、僧侶本来の活動から逸脱するようなお坊さんが多かった。もっと言えば、そういう、曾て政治体制を超越する力を持っていた宗教的な権威も、幕府の政治体制の枠の中に引き込みたかった、統制したかった。諸般のいろいろな理由があると思いますけれども、ともかく、江戸幕府は江戸

時代に入ってくると、宗派の自主的な運営に任せていた僧侶養成組織というものを、幕府の意向に適した形、政治体制が考えるお坊さんのあり方、それに近いと思う形に規制を加えてきた。その結果、有力寺院が自由に、もっと言えば勝手に僧侶を養成していた宗派独自の僧侶養成システムというものを、一定の場所と機関を設けて僧侶養成機関を限定してきたということなのです。

檀林というのは、中世、少なくとも江戸時代以前には、各宗派、各地に小規模な形で幾つも存在していた。何も浄土宗に限ってではなく、どこの宗派でもあちらこちらにそれぞれの地域に有力な寺院というのがたくさんあって、そこでお坊さんを集めて、僧侶養成をやっている、そこで宗教的行為ができれば、お坊さんとして扱っていた。

ところが、そういう形で非常にたくさんのお坊さんができてくる。それから、いろいろな考え方を主張するお坊さんができてくる。そういうことが江戸幕府にとって、体制を維持する上で非常に不都合。お坊さんは税金を払わない。課税対象ではない。それから、非常に人心を惑わす。そういう諸般のいろいろな事情があります。要するに江戸幕府はお坊さんを自分の政治の枠の中に入れ、コントロールできる体制の中に何とか組み込んでやろうとする。その結果、少し飛躍をさせますけれども、全国各地にあった談議所と呼ばれるような僧侶養成機関は一定の数、一定の内容を義務づけられるようになってくる。一定の数と一定の中身を持つ。周りがお坊さんと認めればお坊さんではない。「江戸幕府が公認できるだけのしっかりした学問や修行を積んだ人以外は、幕府はお坊さんと認めないよ」というふうに規制を加えるようになってきます。

その結果、浄土宗では、全国各地にいっぱいあったものが、関東の18ヵ所の檀林以外では、浄土宗の僧侶養成が江戸時代になると一切認められなくなってしまいます。九州や大阪や京都ではお坊さんの養成は認められなくなって、ここにこれからご説明いたしますけれども、関東の18ヵ所の檀林以外では僧侶養成は認めないというシステムが確立をしてき

ます。

でも、ここでもこれから説明いたしますけれども、この関東十八檀林は関東一帯にある程度、分散しております、これが、もう少し時代が江戸時代も下がってくると、江戸中心主義の僧侶養成システムになってまいりまして、この関東十八檀林の中でも特に江戸の檀林と呼ばれるものが、これらの檀林の中で主流を占めていってしまいます。

これは浄土宗ばかりではありません。どこの宗派もそうでございます。ですから、本願寺さんでも浅草や築地などに出張所を設けてくる。あれは、お寺の坊さんの養成ではなくて行政上の問題とも絡んでいるのです。要するに江戸幕府ができて、江戸に寺社奉行が置かれると、関西であろうとどこであろうと、江戸の寺社奉行から寺院に関して伝達は全部出るわけですから、関西に本山があろうと何があろうと、江戸に出先機関を置かないと幕府と対応できないという形で、今度は檀林と違って触頭とか僧録というシステムになるんです。けれども、そういう形で、みんな、機構が江戸中心に移ってきてしまう。当然、僧侶養成もそれに対応する形で、例えば曹洞宗で言えば、関三ヶ寺、龍穩寺、大中寺や総寧寺や、ああいうところも全部、江戸に出張所を出す。江戸にも江戸の三箇寺という形で、江戸に青松寺・泉岳寺・総泉寺が、それとは別に対応するものが出てくる。

同じように、真言宗の場合でも、新義真言の場合で言えば、長谷寺や智積院ではいかにも遠いというので、江戸の町の中に江戸四箇寺とって、弥勒寺とか、円福寺とか真福寺とか、知足院とか、そういうふうに4つの寺をつくって、そこで機構を集中させてしまうというふうになってくる。

もうちょっと時代が降がってくると、あらゆる機構が江戸に起点を置くように宗派の運営が変わっていきますが、この段階ではそこへ入る前に、まず浄土宗として僧侶養成機関が全国各地に分散したものが、関東の18カ寺に限定されて、九州の善導寺なんて、大変、浄土宗では大切な大きな寺があるのですが、そこではもうお坊さんの養成資格が認めれなくなって、そこからわざわざ関東へ下って勉

強しなければいけないというふうに、全国各地から関東の檀林にお坊さんが集まってくるという形をとります。

ただし、全部、きれいにそうなったかといえ、安土に浄厳院なんていうお寺があるのですけれども、それから、和歌山のほうに樹敬寺なんていう寺があるのですが、非常に昔から浄土宗の中でも特殊な地位を持っていたお寺は、公認はされていませんけれども、お弟子さんの養成をやっていた節はあります。ですから、すべてが一本化したとは言いませんけれども、基本的にはここに挙げました、次のページに挙げました、関東の18カ所の檀林に來なければ僧侶養成資格は得られない。ということになります。

幕府が公式に認めていたのは、これ以外に、これはちょっと面倒くさい話。今度は宗派の特殊な話になってくるのですが、この関東十八檀林というのは、増上寺が所属しております、浄土宗の中でも白旗派。これはもうちょっと宗派の特殊な話になります。徳川家がもともとは三河の出身で、松平氏は岡崎の大樹寺という寺が菩提寺で、その関係で徳川家康が江戸に出てきて江戸幕府を開いたときに、三河の浄土宗の大樹寺にかわる菩提寺が増上寺になっていきます。増上寺が浄土宗の中でこの派に属します。ですから、この関東十八檀林は全部、この派の寺です。本当は白旗派というのは、鎌倉時代の後半の区分の仕方、この時点でいけば浄土宗は6つの派があるのです。それはまた特殊な話になるから、そんなことは飛ばしてしまって、6つの派の中で江戸時代まで力が続いてくる、江戸時代までその勢力を保ってくるのが、これと名越派。これは「ナゴシ」と読まないで「ナゴエ」と読むのですが、名越派という、もともとは鎌倉にある地名です。白旗という地名と名越という地名が鎌倉の中にあります。その鎌倉の地名の中で、三祖で良忠上人という鎌倉の光明寺を開いたお坊さんがいて、そのお坊さんたちの弟子に有力なお坊さんが6人出て、それぞれが鎌倉のどこの場所で自分たちの教えを広めたかということで、その地名にちなんで藤田とか白旗とか名越とかというふうになっていく。この2つが江戸時代まで、

その派としての力を持っていた。

この名越派のグループは東北を中心にして力を持つところから、ここに書いておきませんでしたけれども、一つは福島、平の山崎というところにある専称寺、もう一つは栃木の益子というところにある大沢の円通寺、この2つの寺が、ここで今、私が挙げたのとは別に檀林として残ります。この2つの寺も、もっとさかのぼっていけば、折木の成徳寺と矢の月の如来寺というのと、専称寺と円通寺と4つ、中世は名越が僧侶養成をやっていたのに、2つは取りつぶされて、この2つだけ残ったという形があるのですが、面倒くさいことは抜きにして、名越が例外であるけれども、基本的に全国を一元的に支配した、有力になった白旗派。この白旗派というのは、わかりやすく言ってしまうと徳川家康のおめがねにかかった宗派、グループの流れだと。それが全国を統一して支配するようになっていくと、名越派に属する者は、ごく一部の例外を除いて、その関東十八というのが書いてあると思いますが、そこにありますように、その18か所に僧侶養成を限定したということになっていきます。

これらのお寺の流れを簡単にご紹介をしておきますと……。資料を見ながら、お話をさせていただきます。そこに多少、成立の年次を頭に入れながら書いたつもりでございますので、鎌倉に光明寺というお寺があります。これは浄土宗の第三祖と言われる良忠上人が開かれたお寺でございます。これは全体の歴史、ここのお寺の中からいけば、関東のお寺の中では最も由緒を持った伝統的なお寺というふうに理解していただいて結構でございます。

ですから、徳川家康は慶長8年に幕府を開くわけですが、幕府を開く以前は、家康はそれぞれの宗派、浄土宗ばかりではないですから、家康のいろいろなやり方を見てみると、最初は新しく関東、江戸へやってきますから、なるべくどの宗派も、あらゆる政治体制についても、従来の伝統的な後北条時代の支配形態と抵触しないように、あまりトラブルを起こさないように、従来の支配形態を尊重しながら接点を持っていきます。ある程度、幕藩

体制が確立し、幕府が確立し、自分の力が確立してくると、今度はだんだん、それを自分の支配体制に組みかえていく。初歩的な段階では妥協的な政策をとり、自分の政権が確立してくると、ちょっとオーバーな言い方をすれば、強圧的な力で支配していく形に変えていく。そういうのも、浄土宗の場合もどこの宗派の場合も、寺社勢力に対する接点の持ち方も同じなのでございますが、ここでも最初の段階、ごく早い段階では、関東の一番伝統的な有力寺院である、この鎌倉の光明寺を関東の本山に指名して、鎌倉光明寺を中心に三角形の本末組織のピラミッドをつくっています。それは、それまでの伝統的な浄土宗の寺社の支配形態を尊重したということです。

ところが、江戸幕府ができて、もう家康は元和2年に死ぬのですが、その元和元年にいろいろな規則をつくりましますけれども、そのときには、今度は自分の菩提寺である増上寺を起点にして本末関係を再編成します。というふうに、家康の政策というのは、そういうところにみんなあらわれてくるのです。

何で増上寺が徳川家の菩提寺になったか。これもまた非常に微妙なところなのですが、『増上寺史』を書いた責任者として、一番、当を得ているだろうと思うことは、さっきちょっと申し上げましたように、徳川氏というのは、もともと松平で三河の鳳来山のふもとで、ずっとあそこから下へおりてきた、矢作川に沿って平野部に進出してきたグループでございます。ですから、もし、あのあたりの地名のことをおわかりの方があれば、松平には高月院という浄土宗のお寺があり、その下の岩津には信光明寺というのがあり、さらに、岡崎には大樹寺というお寺があるというふうに、松平氏の発展過程とともに、ずっとその浄土宗の寺がついて回ってきております。家康は、三河の一大名時代から大樹寺と接点を持っていたことは、残された資料で間違いございません。

家康がごく早い時期に関東のお寺のことを、「我ら、田舎の本寺たるの間」という言い方をしていますので、お坊さんの人間的な交流を通じて、三河の大樹寺のお坊さんと関東のお坊さんの接点を知っていたと思います。そ

うというようなことで、結局、三河の大樹寺にかわって江戸に本拠を構えたときに、江戸城から比較的距離の近い、比較的まとまった浄土宗寺院を自己の菩提寺に置きかえた。そのときに、その当時の増上寺の住職が三河の関係者と接点を持っていた。そういうような人的な関係で増上寺が選ばれてくるのであって、昔から増上寺が特別大きかった寺だということは、どの増上寺の資料を見ても思いにくい。増上寺が徳川家の菩提寺になってくると、家康はあらゆることの権威づけのために、増上寺を非常に盛り立てると。

ところが、3代徳川家光になってくると、天台の天海さんのほうがいいといって、寛永寺へ行く。寛永寺の話はまた天台宗の木内堯央先生がいらっしゃるし、きょうの本論ではありませんから。それぐらい人的な関係によって、あの宗派は動いたなという感じがあります。ともかく、増上寺が江戸城に比較的隣接した、もともとは今の場所ではなくて、江戸と出てきますから、もっと江戸城に近いところであって、それが江戸城の拡張に伴って今の地へ移っていったと恐らく思われますが。そういうことで、増上寺が一つの起点を占めるようになっていった。

そうなってくると、さっき言ったように、増上寺が將軍家の菩提寺というものを背景にして、浄土宗の、この関東十八檀林の中のトップになってくるということになるわけです。また、話がどこかへ行きかけていますから、光明寺さんへ戻します。

それから、鴻巣勝願寺。これは良忠上人の開いた寺ということですが、実質的には江戸時代にソウヨセイガン（総誉清巖）、それから、円誉不残という有力な学僧が出て、その人たちがこの寺を復興するときに、自分の代から復興したと言ったのでは権威づけにならないので、良忠上人がそこに所領を持っていたということがわかっていますので、そのゆかりの寺というふうに権威づけて、こう言ったと思います。戦国時代に後北条の保護のもとに大きくなって、お坊さんが集まってきた。

それから、瓜連の常福寺。これが多分、ここで後から出てくる名目とか頌義という、い

ろいろな典籍や、浄土宗の檀林のテキストがあるのですが、それらをつくった聖罔とか聖聡とか。開山は違いますけれども、ちょっと特殊な人物なので。これで「罔ゲイ」と読みます。聖罔とか聖聡とかといって、これもいわゆる関東の最も檀林らしい檀林でございます。

どういうことかという、鎌倉の光明寺は古い寺なのですが、途中、それほどよくわかりません。もっと面倒くさいことを言うと、あそこはもともとは悟真寺といいます。悟真寺がある時代に、蓮華寺に変わります。蓮華寺が室町時代のある時代に光明寺に変わります。というふうに、光明寺は良忠上人ゆかりの寺だといいますけれども、良忠上人さんの時代には悟真寺と出てきまして光明寺とは出てこないのです。それで、いろいろあるのですが、それよりは時代が降がりますが、この瓜連の常福寺、ここは聖罔とか聖聡とか、いわゆるこれからご説明いたしますが、江戸時代の檀林のテキストになる本、その本はこの人たちの編さんにかかるものが圧倒的に多くございます。そういうふうに、この瓜連の常福寺というのは、南北朝から室町期にかけて、浄土宗では関東では珍しく、学者さんが出たからでございます。ですから、ここは飯沼の談議所とか、瓜連の談議所とかいって、いわゆる最初に書いた談林という形で早くから資料が残っている場所でございます。ここは、もともと、由緒寺院ということですよ。

芝の増上寺は、この人の引っかけりということに現在はなっていますけれども、確かに資料を見ると、武蔵のどこかに聖聡が行ったと資料には出てきますけれども、どこへ行って何をしたとは書いてない。けれども、増上寺を関東の中心寺院に説明していくときには由緒が要る。江戸時代の初めに大きくなったよと言ったのでは、権威づけにならない。そこで、この人を開山に仰いで、いろいろなことをしているということですよ。

それから、同じように、次に飯沼に弘経寺が書いてありますが、ここも聖罔の弟子の聖聡が開いた寺。ここもさっき言ったように、古くから飯沼の談議所という言葉が出ていて、瓜連と並んで浄土宗の中世の有力な学問所で

す。

それから、小金の東漸寺、生実の大巖寺。それから「ショウジツ」と書いて「オユミ」と読みます。場合によっては、小さい弓と漢字で当てることもあります。ですから、オユミ。これはあそこら辺の原氏の菩提寺、有力な城主だったところです。これはまた、後から話をしていきますけれども、小金の東漸寺、これは高城氏の菩提寺であって、これも今の北小金の駅のすぐそばのところにあります。これもそれなりの寺です。きょう、これからマークしたいと思うのは、次に生実の大巖寺。もし別の言い方をすれば、今、淑徳大学があるところ。あそこは生実の大巖寺が、その後発展していくのですから。発展していくというのは、場所的にはあそこがダブるのですから。

この生実、千葉の大巖寺というのは、さっきちょっと申し上げましたように、江戸中心主義がなければ、徳川家康が関東へ入ったころ、具体的に言えば天正18年、西暦で言えば1590年、徳川家康関東入国当初、関東のこれらの檀林相当寺院の中で、どこが一番力があつたかといえば、ためらいもなく、この生実の大巖寺が関東の浄土宗を代表する寺であつたはずです。

さっき私が、徳川家康が関東のお寺にお願いごとをするときに「我ら、田舎の本寺たるの間」云々と言っていたのは、どこを指しているかという、大樹寺が本寺と言っているのは生実の大巖寺です。あそこを家康は自分たち、田舎の本寺だから、戦国時代に合戦で天正18年の4月から8月ぐらい、合戦に巻き込まれた生実の大巖寺を保護するために、秀吉の家来である市橋長勝という、あそこの在番をやった男に、「この寺はおれたちにとって特殊な寺だから、面倒を見てやってくれ」

まだ家康が関東へ入る前から、そういう手紙を出しています。

というふうに、大巖寺のお坊さんというのは、その系譜はさっき言った飯沼の弘経寺の流れがまともに行っているお寺で、飯沼の弘経寺の系譜が岡崎を通じて、さらに京都の知恩院へ行っているというふうに、お坊さんの人脈上、まことに見事につながった寺なので

す。

それは、これから話をするお話ともかかわるのですが、生実の大巖寺には、大巖寺版と言われる木活字本の浄土宗関係のテキストが関東で一番最初に刊行された寺が、この大巖寺です。生実版とか大巖寺版とかいいまして、木活字本の浄土宗のテキスト類を刊行しています。関東で一番最初です。

もちろん、幕府によって江戸時代の初期に朝鮮から持ってきた銅板の活字やいろいろなもので刊行されたことは否定しませんが、一宗の中で、浄土宗の中で木活字で、この浄土宗のテキスト類を刊行しているということは、関東では非常に珍しいことです。それは、逆の見方をすれば、活字本だけれども、今から考えれば、もう木活字ですから、木活字でそういうテキストを刊行するということは、一つには、それだけの経済力があつたということです。もう一つには、それだけのお弟子さんを抱えて、需要があつたということです。その時代の慣例で言えば、お師匠さんのものを書写して、書き写ささせていただくことが、あのころの免許皆伝ですから。お師匠さんから、お師匠さんが持っている本を写すことを許可されることが、一つの法流伝授ですから。そういう中で、あそこは、もう慶長年間早い時期に、大巖寺版と言われるような木活字でテキストを刊行している。そういうことから言っても、非常に注目される。

いわゆる、今、ここにある、これは、いわゆる版木ですから。木活字というのは、活字を一つ彫って、それを組むのですから。ですから、これは骨董的な価値を言ったら、また変な話になるのですが、版本は少々古くても大した値段が出ません。多分、図書館の方はよくご存じだと思います。木活字だったら時代にかかわらず、相当、値段が出ます。

木活字と版木は割と簡単に見分けがつかず。刷りだけから言うと、こういうふうに版木で刷ったほうがよっぽどきれいに刷れます。いいですか。お気をつけいただきたいのは、版木はこういうふうに逆にして、ピシッといきますから、これで刷ったものは非常にきれいです。

ところが、木活字は一つひとつ、字を当て

はめて、型をつくっておさめていきますから、申しわけございませんが、非常にふぞろいで。それで、一番典型的にあらわれてくるのは、こういうところの型の締めのところを見ていただければ、組んで、後から型を締めますから、どうしても、こういうところがうまくいっていません。ですから、一見、刷りがきれいで、よく見えてというなら、版木のほうがきれいだから、価値があるかと思うかもしれませんが、あのあいまいに写っている木活字のほうが、よっぽど価値を持ちます。

また、話がどこかへ行きましたけれども、そういう意味で、関東ではもう、こちらで言えば、早いものは寛永ぐらい。寛永ぐらいから後になってきますと、増上寺なんかでは、もうたくさん、版木でテキスト類を刊行します。もう増上寺は版木の入れ場がないほど、たくさん残っています。これは片づけるのが重いのです。これは、だって裏表しかないわけでしょう。これがダーツとあるのですから、この版木を片づけるのはえらい騒ぎで、しかも、膠で真っ黒になってしましまして、これを動かすのは嫌なのですけれども。増上寺には、ものすごいたくさん残っています。

戦争中、増上寺は管理に困って、後ろに三康文化研究所という研究所があるのですが、その壁の板がなかったとき、ひどいのは版木がぶつけてありました。木の材質はいいですから。普通、よく言われるのは、桜と言われてはいますが、これは桜ではないと思えますけれども、山桜を海水につけてカチンカチンにして、狂うものは狂わせてからやると、よく言われていますが、これがどうであったか、そこまで見ておりません。版木とは違って、これらの檀林が江戸時代に入ってから、テキストとして版木のテキストをたくさんつくってくるのはあるけれども、生実の大巖寺というのは、それ以前から木活字でテキスト類をつくっていたという、非常に特筆される寺です。

ですけれども、何で、この千葉の生実の大巖寺がある時代に増上寺にとってかわられるかということについても、これは多少わかっていることでございます。これは表向きは教義上の争いで、大巖寺の住職雄誉霊巖上人が

敗れて、増上寺の住職源誉存応上人が勝って、増上寺が主流を占めたと、本の上ではそう書きます。

今、深川に霊巖寺というお寺があるのですが、霊巖島というのがある。多分、きょう、船で行くとすると、どうするのかな、近所でも通るのかな。昔、霊巖島という島があったのですが、その霊巖島という島は、霊巖上人が築いた島だから霊巖島と言われるほどの島なのですけれども、この霊巖上人というのが、非常に若いときから有名な方でして、この方が浄土宗の安心問答、面倒くさいことを言ってもしようがありませんから、浄土宗内の教義の論争で、増上寺のこの時点で住職をしていた源誉存応、後の観智国師と呼ばれる人物ですけれども、それと論争して敗れたために、流れが大巖寺から増上寺へ移ったと言われてはいます。それは多分、さっき私が言いましたように、それも一つ、あるのかもしれないけれども、どう考えたって、安心問答というのは、よほどの専門家でも判断は難しい世界であって、少なくとも著書の上から見たら、学問的に一冊の本もない観智国師、源誉存応のほうがどうして勝ったのだと思うぐらいです。霊巖上人はたくさん著書もあってわかっていますから、多分、そんなことよりは政治的な、幕府が後ろにあって、関東のトップクラスの寺と將軍家の菩提寺の住職を形式上、対立をさせて、江戸幕府がバックアップして、こちらの勝利にして、こちらに指導権を持ってきたと。それで江戸の増上寺に起点をみんな持ってきたと考えるほうが、個々の事例はともかくとして、相対的に見れば、きっとそうなんだろうと思います。そういうことです。

ただ、負けた霊巖上人がすごいのは、その後、多くの民衆の支持を得て、一度、大巖寺のお寺を追放されながら、房総半島で復活をして、あちらのほうで力を持って、それでもう一回、海伝いに深川の霊巖島を築き、そこに霊巖寺というお寺をつくりました。幕府の手も経ない寺の住職でありながら、特に推薦されて知恩院の住職になって、知恩院の一山を復興する。普通だったら、一回、お上にいらまれたら、幕府にいらまれたお坊さんは、大概、失脚してしまうのですけれども、そう

市のある金山の山の中に、新田氏の菩提寺として大光院というお寺をつくっている。ですから、この大光院というのは、明らかに徳川幕府が意図的に自己の系譜の正当性の主張のためにつくった寺。それがもう伝統も何もないのに、関東の由緒寺院をさしおいて、一発でこれが檀林になってしまう。伝通院も一発で水野氏の菩提寺だと言って作った。そういう中で、いきなり寺院建立、即、檀林。僧侶養成資格の寺。

同じように、一番最後に出てくるのが、深川の靈巖寺でございます。これなんかは、ずっと後、靈巖上人がつくった寺ということになって。

こういうお寺を見てまいりますと、浄土宗では、さっき言った増上寺の源誓存応というお坊さんが、ある時代に一遍につくったと言っていますけれども、源誓存応は元和年間に死んでしまうのですから、どう考えたって深川の靈巖寺というのは元和よりも後の寛永年間にできた寺ですから。その増上寺の観智国師源誓存応が政策的に一遍につくったなんていうことは間尺に合わない話です。

それで、このお寺を見るとわかるように、前半部のほうは、かなり関東の浄土宗寺院の中で伝統的な有力寺院が、一つはそのまま檀林に移行してきている。それから、もう一つは、さっき言ったように、伝通院とか大光院とか、そういふに江戸幕府の意向によって新たに建立された幕府の縁故寺院が檀林になっている。もう一つは、その靈山寺とか幡随院とか靈巖寺とか、これはいわゆるそれぞれの寺の開山である大超にしても幡随意にしても靈巖にしても、お寺自体が成立したのは慶長年間に入ってから決して古くはないのですが、この方たちが非常に学僧として誉れが高い。ですから、江戸の町の中に新しくつくられた寺であるけれども、この学者さんのところにはお弟子さんがたくさん集まっていたように思われるので、そういうところがそのまま僧侶養成資格を認められた。

この中で何で檀林になったかわからない。不謹慎な発言をしていますけれども。例えば、真ん中辺のところ、江戸崎の大念寺という寺があります。これは茨城県の那珂郡の江戸

崎。取手からずっと奥へ海のほうへ入ったところですが、大念寺は、開山の源誓慶巖というお坊さんのキャリアを知らなくてはなりませんけれども、これが何で檀林になったかよくわからない。というような寺もあります。

そういうことを加味して、この関東十八檀林というのが、どういうふうにつくられたかということを考えてみますと、基本的には、関東のそれまでの有力寺院がそのまま僧侶養成機関たる檀林に江戸幕府が認定した。

それから、次の理由として、江戸幕府の由緒寺院、増上寺、大光院、伝通院などに代表されるような、幕府の由緒寺院も権威づけのために僧侶養成資格が同時に与えられた。

それから、もう一つ、大超とか靈巖とか幡随意に代表されてくるのは、いわゆる本物の学者さん。そういう学者さんたちがつくった寺。必然的にそこにはもうお弟子さんが集まっていたと思いますので、そういうところのどう言いますか、学者さんのところの寺。

さらに、その中で江戸崎の大念寺は、地域割りがあったと思います。瓜連の常福寺以外、常陸の寺がないのです。ですから、そういうような意味で、地域割りが加わって、こういうような数の、18という数。

もう一つは、これは語呂合わせなのですが、十八公が松平の「松」なのです。それから、浄土宗は四十八願の中の第十八願を大切にします。というような語呂合わせがあると思います。ですから、幾つでなければならなかったことはないのだと思いますが、そのときそのときの社会的な要請に応じて整備していったときに、ちょうど18になった。それで、浄土宗にとっては非常に語呂のいい数なので、この形で整理したのだらうと。ですから、18というのは、最初から意図的にできた数ではなくて、結果オーライの可能性があって、一遍に成立したのではなくて、段階的に成立した制度だらう。

これはよその宗派の話になりますが、先ほどお話くださった木内先生のところでも、天台宗の場合にはよく八檀林、八檀林と言われていますけれども、九檀林だったことも十檀林だったとも承知していますし、でこぼこがあったことを承知しておりますので、どう

もその数というのは時代によっていろいろあるなどということはあると思います。

本論ではないものですから、前置きが長くなりましたので、そういうふうな、いろいろな形があるけれども、結果として18に整理して、浄土宗ではお坊さんの養成機関を整備してしまっただけです。これはどこの宗派も考え方は同じになるはずでございます。勝手にお坊さんを養成されては困るから、幕府とすれば、僧侶養成資格を持った寺を何らかの形で規制を加えた。

それで、浄土宗ではそういうふうに数で一つ規制を加えるときにも、これまでお坊さんの養成の仕方というのが、どちらかといえば実践面に重きが置かれて、お経が読めればいいというお坊さんから、もうちょっと学問的にきちっと勉強をさせるということを幕府は狙った。

対世間的なことから言えば、それぞれの宗派の特殊な教義にどれだけ長じているか、理解しているかというのは、世間の方から言えば、さしたことでなかった。ですから、葬儀や儀式が執行できるお坊さんがあればよかったですけれども、それでは幕府としては一定期間、お坊さんにはきちっと学問をし、修行をしろと言っているのに、1、2年でそういうことが出来てしまうようでは困りますので。ですから、非常に学問的にも試験制度、うるさい規則をつくって、勉強するシステムをつくらせた。

それで、浄土宗ではどうしたかという、次のほうをめぐっていただきました。

浄土宗では、どこでもいい、檀林に入ったお坊さんは、驚くなかれ、9つの段階があります。9つの段階をそれぞれ試験を経なければ上がっていかないようなシステムをつくっていきます。九部といって、段階的に、そこにゴシックで書いてあるところだけを見ていただければ結構です。

これは最初、これで「ミョウモク（名目）」と読みます。名目部。次が「ジュギブ（頌義部）」と読みます。名目、頌義。これで頌義。その次が「センチャク（選択）」。真宗と浄土宗の読みの違いだけのことで、真宗と浄土宗では、この読みが違います。こちらは「セ

ンチャク」と読みます。それから、「ショウゲンギ（小玄義）」、「ダイゲンギ（大玄義）」。それで、「モンゴ（文句）」、「ライサン（礼讃）」、「ロンブ（論部）」、「ムブ（無部）」というふうに、次のページにゴシックで書いてあります。文句、礼讃、論部、無部。これを少しご説明をいたします。

まず、大きく分けて説明をいたします。ここに書いているのは、さっき書きました関東十八檀林というのは、白旗派の18ですから、白旗派の浄土宗の僧侶養成のシステム、勉強の仕方のシステムということです。

それで、その解説にどこか書いておきましたけれども、名目とか頌義とかというのは、これはさっき言った聖問、それから聖聡、聖問や聖聡、このお坊さんたちが南北朝から室町の初期につくった本でございます。聖問や聖聡というお坊さんが鎌倉末、南北朝、室町ぐらい。最後は応永前後ぐらいになります。その時代につくった本でございます。

そこから後、選択というのは、いかにも浄土宗の法然上人の書かれた『選択集』を研究する、勉強する部門でございますので、ちょっと先に大ざっぱに言ってしまうのですが、白旗派の関東十八檀林の僧侶養成システムのテキストというのは、聖問や聖聡の教学を通して法然上人、浄土宗の宗義を勉強するという、極めて白旗派という意識の強い学問体系になっています。ですから、この辺に出しておきましたけれども、仏教学、浄土学は今で言えば、総論的なものを法然上人から入るのではなくて、この聖問や聖聡が体系づけた浄土宗の学問体系から、段階的に法然上人の『選択集』へ入っていくという、極めて白旗派独自の学問体系です。

ところが、同じ時代、東北で活躍をした、名越派というところのこの学問システムを見ると、一番最初に礼讃部と言っていますが、あの礼讃は『往生礼讃』の礼讃ではなくて、声明の礼讃だと思います。実践をやらせたら、すぐに名越派では、まず選択部から入っていきますので。名越は『選択集』から勉強する。いわゆる、法然上人のものから勉強させて、段階的に中国、インドへ勉強を進めていく。

というふうに、江戸時代でも派によって浄

土宗の僧侶の養成のシステムが違ってっている。ですけれども、残念ながら、名越派のものはほとんど資料が残ってきていません。たまたま益子の大沢の円通寺というところにある程度ありますけれども、圧倒的に典籍や本で資料が現在多く残っているのは、こちらの白旗の、今、これから申し上げるシステムが圧倒的でございます。言ってみれば、江戸時代を通して、それだけ浄土宗はこの関東十八檀林が全国を押さえ、江戸幕府の意向が徹底したということとございました。

一応、ここのところに名目と頌義部の代表的な、この手のものはいっぱいあるのですが、それを出しておきましたが、こちらのほうはこういうふうに、いろいろ分けて、段階的に論理的に勉強させるようなシステムになっているということとです。

浄土宗では、『略名目図』とか、名目何とかかんとかというふうに。末書という言葉を使っていいですか。末書というのは、それぞれのテキストの注釈書。通称、末書、末書と言ってしまふのですが。その、要するに当然、檀林でテキストをすれば、そのテキストの講義録もあるし、その解説書もできてくるという形で、名目何とかかんとか、頌義何とかかんとか、そういう形でいろいろな注釈書ができてまいります。ですから、基本的に浄土宗の檀林に、あるいは結局、それをみんなが勉強するわけですから、そういうのを持っているわけですから、そういうのを調査するときに圧倒的に多いのは、名目、頌義、それから選択というふうに、聖問や聖聡教学のテキスト類、さらにその末書類、注釈書類。それから、それが終わってから『選擇集』に行く。そういう形の典籍類がたくさん残っております。

大体、関東で言いますと、あまり見られませんが、早いものは寛永ぐらいから版本がもう関東の檀林で出されております。最も盛んになるのは、寛文、貞享、要するに元禄の前ぐらいのところから版本類は関東ではよく出ていると思います。

それは一つには、元禄年間に浄土宗では義山というお坊さんが出まして、このお坊さんが大変学者でございまして、これは知恩院の

お抱えの学者ですけれども、この方のところに浄土宗のテキスト類というのは非常に整備されます。いいか悪いかいろいろあるのですが、浄土宗の版本類、テキスト類を見ていくときに、一つの節目は、このお坊さんが絡んだ終まないか。これは元禄年間ぐらいの人です。1700年前後ぐらいに活躍した、義山というお坊さんがいるんですが、このお坊さんが江戸時代の浄土宗の典籍類を再構築した方でございます。ですから、テキスト類がそれより前か後かというのが非常に微妙でございました。

例えば、檀林のテキストからちょっと話題がそれていきますけれども、『選擇集』でもいいです。『選擇集』なら『選擇集』の場合でも、義山版の『選擇集』というのがあります。法然上人の代表的な著書である義山版の『選擇集』があります。残念なことに、『選擇集』というのは京都の廬山寺であるとか、当麻の往生院であるとか、幾つか鎌倉期の古い写本が残っているのですが、法然上人の古い写本類を見ると、ほかの經典や注釈書から引用している、原文の引用の部分があります。その引用部分の中に、申しわけない、残念なんです、かなり間違いがあります。多分、それは昔の方ですから、いちいち、大蔵経なり一切経に当たって校訂なさるわけなくて、お師匠さんが書いていた書物だとか、自分が日ごろ読んでいた、そして抜き出した手控え、そういうものを見ながら、講義をなさり、お話をなされたのだと思いますので、そういう中に誤字・脱字・逸文があるのは僕はやむを得ないと思っております。それは法然上人だけではありませんから。そのころの著作にはいっぱいそういう例を知っていますから。

それを、義山版の『選擇集』になると、義山版は、京都の方は鹿ヶ谷に法然院というのがあることをご存知だと思いますけれども、あそこに忍激という有名なお坊さんがいて、そこで大蔵経を、あそこで校訂なんかをいっぱいやっていますが、義山さんというのは大蔵経の校訂を一生懸命おやりになられた方なので、義山版の『選擇集』になると、引用文が大蔵経と対校すると、ほとんど間違っていない。法然上人が意図的に引用を変えたと思われるところ以外、単純なケ

アレスミスと思われるところは、もの見事に大蔵経どおりに直っている。一事が万事でございまして、その他の著書についても、引用について義山は、みんな、対校をして、それまでの浄土宗の著書のトラブルについて手を加えてくれている。

それであるがゆえに、明治になってから『浄土宗全書』、多分、各大学の図書館にご所蔵いただいているいると思いますが、各大学にある『浄土宗全書』のテキスト、底本、要するに、どれを底元本にして刊行するかという議論をしたときに、近代の学者さんたちは当然発想として、テキスト・クリティクをしたときに、原文に一番忠実なものがテキストとしていいとご判断なされたはずです。原典と対校するときに、引用が一番正確なものが本として信頼できるというご判断に立ったと思いますので、圧倒的に『浄土宗全書』の底本は義山版が多うございます。まだ、『選擇集』などは軽いものでございます。

浄土宗の方以外にはあまり関係ないかもしれませんが、法然上人の語録を集めた『古本漢語灯録』、『古本和語燈録』というものがあるのですが、その『漢語燈録』なんていうのは、義山版の『漢語燈録』か古本の『漢語燈録』か区別しないと、中身が言っていることが違うほど、両方の文章、変わったところ、こんなになってしまうほどひどいものです。自宗のことであまり名誉なことではありませんけれども、真宗の恵空さんがやられたほうが、古本の形をよっぽどよく残してくれています。

というほど、また話がどこかへ行ってしまうからいけません、浄土宗のこういうテキスト類というのは、檀林のテキストと対応した形でいっているということと、それから、もう江戸時代の初めから関東でたくさん版本は出されるんだけれども、浄土宗にとって一つの変革点というか、版本でご判断いただくのは、これよりも前か後かということは、ちょっとチェックをしてくださいますよということが言えます。

ただし、版本の悪口を言います。私は歴史をやっていて、文献専門の男でございまして、ですから、今言ったようなことはたくさん

知っておりますけれども、僕は、版本の跋文とか刊記とか、一番後ろにありますね。これについてはほとんど信頼していません。何でか。嫌というほど増上寺の版木をいじりました。そのときに、このところは埋め木をしていっばい……。一番最後、多分、あらゆる本の最後に、多分、これは何年何月、どこで刊行したというようなことが、この一番後ろに。これは年号は出てきませんね。年号が出てくるのがあると思うのですが、よく、後ろに刊記があるのですけれども、何年何月、どこの本屋で、どういうふうにして刊行したと刊記が書いてあるのですが、あそこのところが嫌というほど埋め木して補刻してあるのを見えています。版ですから、こうやって版木を入れかえてしまえばいいのです。そこをもう一回、彫り直せばいいのです。そこだけ埋めであるのです。ですから、やりかえた。

それから、大蔵経の話まで入っていくと失礼なのですが、あの大蔵経だって、いっばい補刻してあります。埋め木して補刻してありますから。その埋め木、補刻のそれで、この大蔵経の刷りは早いものであるかどうかと。どれよりも前の刷りかどうかというのはすぐわかります。

ということを嫌というほど見えていますので、例えば増上寺で宋版と元版と麗版の三大蔵経がそれぞれあるのですけれども、あれは金山正好先生という方が、「何で一枚一枚、あんな面倒くさくチェックするのかな」と、初めはわからなかった、素直に言いました。私は一緒に仕事をしていて。あの先生は、埋め木、補刻の状態を全部チェックして、この刷りがいつごろの刷りだというふうにご判断をなされた。ですから、あれはもう版木ではない。刷ったものしか残っていなかったんですよ。刷ったものの中で、埋め木や補刻やそういうところの操作を見ていて、言われてみれば、「ああ、なるほど。ここのところは字のイメージが違うな。だから、ここのところはこういうふう埋め木をして掘り直したな」というのが、なれてくれば想像がつく。多分、経験の多い方はもっとわかるのだと思います。僕は単純に版木のほうで勝負しましたから。版木を見ているときに、最終のこの刊記のと

ころに埋め木してあって、幾らでも、年号でもあれでも。別の方がもう既に言っていますけれども。全く同じ版が本屋が違って刊行している例がいっぱいあるとお書きですから。

例えば、ここがこうなっています。これがどうかわかりませんよ。これを見て。これだけ埋め木して、これだけ、ここに年号を入れるのはわけのないことです。こういう操作は幾らでもしています。

これは比較的早い本ですね。これは、この表紙やこの形を見るとわかるのですけれども、これは寛永かどうかは知りませんが、比較的早い時期の本です。活字や体裁を見ると、およそ見当がつかます。ただ、どうなのかな。このところに刊記がいくことが、我々の常識で考えてベストかな。後序がある前に刊記がいくかな。

という気がしますので、僕はあくまで書写本にこだわるのは、筆で書いたものは、これとは別に、幾らごまかしてくれてもわかりません。ですから、私は写本には一定の信を置きますけれども。写本に書いてある奥書をそのまま信じるという意味ではありません。ではないけれども、刊本類の刊記や奥書に比べれば、向こうのほうが紙や墨や筆で判断できますので、字体で判断できますので、これはこれだけでは何とも手が出ないと思っています。そういう意味で、そこに書いてある刊記がそうかいなという疑問を持っている一人だということはおし上げておきます。

そういうようなことで、檀林のテキストへ話を戻しますけれども、まず、名目部というのは、さっき言った聖岡の著書で。これで浄土宗概論的なものをやらせて、さらに頌義というところへ行って、さらにそのことを済ませた上で、さっき言ったように、聖岡・聖聡教学を通して、法然上人の基本的な著書である『選擇集』を勉強させるという、関東檀林独自の勉強スタイルを関東十八檀林ではとったようです。これなどは極めて江戸時代の特殊な学問形態です。ですから、明治以降の先生方は、これは檀林教学だから、聖岡教学だからと。現在では、法然教学に帰れと言って。それこそ、現在の大学の先生の専門家でも、聖岡・聖聡の研究者は、もう恐れ入

りますが、ほとんどいない。ですから、本流ではないということです。

問師教学という言葉があるのですけれども、今、問師教学、大学の先生、「だれ、やってくれる」と言ったら、みんな、「いや、ちょっと」とおっしゃる。それはもうやっぱり、法然上人や古いところをやらないと、ある時代の教学体系では、今の世界でどういいますか、ついていけないというか。ですから、それを専門とする方はいない。

それから、『選擇』へ行ったら、それから小玄義、大玄義というのは、今度は中国の善導大師のつくられた著書の解釈に入っていく。その玄義文ということで、観經の書の部分を分けて、小玄義、大玄義という形で区分をして入っていく。

同じように、文句、礼讃までは、全部、中国の善導大師。ですから、聖岡・聖聡教学を通じて、法然上人の『選擇集』に入る。さらに、法然上人が師と仰がれた、中国の善導大師の著作をその後で勉強する。

中国の善導大師の著書を勉強したら、さらに次に行って、論部というのは『往生論』、または『往生論註』イコール、そのインドの天親の著作。ですから、形の上でいけば、インド、中国、日本。逆に、日本から段階的に勉強させていくというシステムになっています。

最後、無部というのがあります。無部というのは、部がないということではなくて、もうここまで来ると、一応、論部まで来ると、 $3 \times 8 = 24$ 、24年で基本的には浄土宗の学問体系は終わり。無部というのは、自由学という意味です。自身がさらに志向する学問を自由にやっていいということで、無部というのが、部がないというのではなくて、自由学という意味にとっていただいて結構です。

ただし、これはこちらのほうの、私がかいたほうでいくと、24ページに出てきますけれども、寺社奉行に提出した書類だと、24ページをちょっと見ていただきますと、「浄土宗で増上寺並びに十八檀林、学籍左のとおり」。これは増上寺を入れれば18ということでございます。その下段のほうの一番右のほうに、逆に書いてありますが、論、礼讃、文句、大

玄、小玄、選択、頌義、名目と8つしか書いていません。無部は書いてありません。ですから、我々は通称無部と言って、自由学と言ってはいますが、寺社奉行のカウントの中ではもしかしたら8つなのかもしれません。

「諸宗階級」では9つとも出ていますがけれども、8つという換算で、無部というのは、よりやりたい学問を自由にやっていたよと。逆に言えば、宗学に限定しないよという意味でございます。という形でなっています。

ただ、これは $3 \times 9 = 27$ になりますから。ここまで全部、終わらなければ、お坊さんの資格はとれないなんていうことはありませんから、大体、15年ぐらいでお坊さんの資格はとれていますから。ただし、どのランクの寺の住職になるかによって就学年数が違ってくるということです。

それぞれについては、そこに書いてありますように、檀林の住職とか、特別の寺の住職は、無部まで行かなければいけなかった。一応、五重兩脈の伝授とか、いろいろなものは八部にしていますけれども、短縮、例外期間がありますので、 $3 \times 5 = 15$ 、それぐらいでとれています。

これで、以上の九部は檀林学寮の平素の学問研究であって、夏冬の両安居には本坊の客殿において行われた法問に出席聴聞した。それから学徒は各部において宗乗の研さんをしたけれども、有志の者は余乗を研究したり、教養として外典を勉強しても差し支えなかった。

檀林における教授方法、勉強の仕方には講釈と法問があります。講釈というのは講義であるから、入寺年数の浅い者にとっては授業であるけれども、講義をするほうの者にとっては平素の蘊蓄を発表し、自分の力を判定される機会。だから上席の者が下部の者に対して講義をする。それをもっと上の者が、その講義内容で判断する。というふうに、極めて段階的な勉強のシステムになっている。それぞれの段階では、それぞれの席があったと書いてあります。そういう形で問答とか、いろいろな形をやりながらやっていた。

ただ、檀林の勉強の仕方の中身については、私がほかの宗派のことも、それほどよく承知

しているとは言いませんけれども、多分、これは法問があったり、いろいろなことがあったりするの、みんな一緒のはずでございまずので、勉強したことについて何らかの結果を求められて、年数さえたてば上がったわけではなくて、何らかの判定方法があって、それに従って上の部に進んでいったし、合格しなければ、そこにとどまっただろうと思うし。そういうようなことがあったと思っております。

お坊さんとしては、これは学問面でございまして、これ以外に実践面としてお経やら作法やら、いろいろなことも同時並行でやっていたはずでございまずので、そういうものが相まって、お坊さんが養成されていったと思います。

大体、20分ぐらいまでと言われておりますが、最後、ちょっと質問を受けたいと思います。大変、早口にいろいろなことを思いつくまま、適宜、しゃべってまいりまして、あまりまとまりもなかったと思います。皆様方が多分、それぞれお抱えというか、ご関連のあるお宗派があると思いますので、そういうところの仏教関係のテキストについては、基本的には江戸時代には僧侶養成と極めて密接な形でテキストがつけられて、その末書類、注釈類がたくさんあると思います。それから、それとは別に祖師の著書であるとか、有名なお坊さんの著書、さらにそれに伴う末書類というものが、各大学とも仏教系のそれぞれの図書館は必ず抱えていらっしゃると思いますので、それがどういう順番でそれぞれ勉強された本なのかということについても、多少、せつかくの機会でしたので、浄土宗はこうなっているという事例を申し上げますので、それぞれのお宗旨ごとに、そんな目で見ただけだと、江戸時代には、どんな形で講義がなされていたとか。いい悪いは別にして、それが一つの時代の流れだということを確認していただければ、ありがたいと思われましたので、まとまりのないことを思いつくままにお話をさせていただきましたが、しゃべりまくりましたので、どうぞ、わからなかった点やご質問があるかと思っておりますので、それを受けさせていただいて、答えられること

はお答えをいたします。これは私が進行してしまっているのですか。

では、大変勝手ですが、もし、あそこはどうなんですか、これはどうなんですか、お気づきの点がありますれば、わかる範囲でお答えをいたします。どうぞ、ご自由にお願いをいたします。はい。どうぞ。わかれば。

質問者 龍大の田中といます。

宇高 はい。よろしくどうぞ。

質問者 一般的に学生、所化と言う。

宇高 それは能化に対する言葉で所化ですね。

質問者 はい。それで、一般には能化と言うんですか、授業をされる方は。浄土宗では。

宇高 浄土宗では能化というのは定義がございません。住職でなければ能化は言っておりません。ですから、もっと言いますれば、学頭であるか伴頭であるとか、一老であるとか二老であるとか、一文字席とか、そういうふうに、増上寺並びに有力檀林の中の学頭の段階に応じた呼び方がございまして、能化というのは増上寺では一人しかおりません。ですから、増上寺の住職しか能化と言いません。

質問者 では、今で言う授業のできるの。

宇高 それはいわゆる、さっき言いましたように、浄土宗の場合にはランクが上の者で、ある席以上の者は、新しい部位の者に対して指導係ですから。一番上が全部、講義するのではなくて、先へ進んだものが下部の者を指導する。ですから、先へ進んだ者が一文字席とか何席とかというふうになっていて、その対応する形で、上に上がるに従って、扇間とか一文字席とかというランクができてまいりました。その一番上へ行った者が学頭であり伴頭である。それは住職体系とは別に、所化さんたちの指導体系が別にございます。それで上部に属する者が下部の者を指導し、その上部の者の指導を、さらに上の者が適切であるかどうか判断しながら、それも試験をしている、という形でいきますので、今、能化というご質問に対しては、増上寺で言えば、住職しかいない。一般人でも住職は能化と言っている。ですから、能化、所化という対応であれば、住職しか能化と呼んでいない、という答えになります、浄土宗の場合には。

質問者 それと、もう一つ。

宇高 はい。どうぞ。

質問者 十八檀林になりました。これを選ぶのは学生の、選ぶというのは、どこに行くか……。

宇高 わかりました。先走って答えませけれども、多くの場合、地縁的あるいは血縁的な、住職の血縁的な形で初入寺は決まっています。どこの檀林に入るかというご質問ですよね。そのときには、ですから地域的な地縁的なものどくるか、その住職の血縁的な流れ、そういうもので最初の初入寺は決まっています。

けれども、これも江戸中心主義と絡んでくるのですが、ランクが上になってまいりますと、地方の檀林にはそれ相応のしかるべき指導者がいなくなります。ですから、ランクが上になってくると、かなり江戸檀林へ来てしまいます。ですから、初入寺は地縁、血縁で決まっているけれども、高い部のほうになってくると、江戸に集まる率が高くなっている。そういう答えで、よろしゅうございますか。

質問者 ありがとうございます。

宇高 はい。もしほかにご質問があれば、どうぞ。はい。どうぞ。

質問者 先ほど、白旗派（しろはたは）……。

宇高 白旗派（しらはたは）。ごめんなさい。はい。

質問者 白旗派のやり方が全部、十八檀林に展開された。

宇高 はい。申し上げました。

質問者 そうしますと、残りの名越派等々の方も、住職になろう、もしくはそれなりのステータスのポジションに着こうと思えば、白旗派のやり方をやらないといけない。ところが、それでは本来の4派あったところの残りの3派の俗に言う……とか、それから、実践方法の体系の体験というのは途切れますよね。そのあたりはどうなんですか。

宇高 まず、先ほど、ちょっと乱暴にご説明をいたしましたけれども、関西には一条、三条、木幡、それから関東と言えば、白旗、名越、藤田。当初、六つあったことは認めます。ですけれども、江戸時代まで、それらの

派閥として力を継続してきたのは、一条、三条に多少、京都の浄華院系みたいな流れがないとは言いませんけれども、実態的には、白旗と名越しか、グループとして、教団として力を残しているところはなくなってしまいました。

もう一つ、後段の質問に対する答えになりますけれども、名越で勉強して、名越派の本山の住職までは問題ございません。ただし、関東の檀林のしかるべきところに入ってくるのだったら、当然、名越から白旗に転派して、もう一回、勉強し直さなければ、学力に応じて移行したようですけれども、これは名越から来た白旗のお坊さん、白旗から名越に行ったお坊さんということが入寺帳に書いてありますから、当然、そういう移動があった。逆に、名越の連中は名越の寺の住職になってくるなら、名越で勉強しろという言い方をしたと思っています。それが、入寺帳というのが残っておりまして、それがお坊さんの学生台帳みたいなもので、いつ、どこで入寺し、どこでどういう勉強をして、どうだということが、みんな、入寺帳に履歴が書いてありますので、その中で名越、白旗の転派は、数は少ないですが、見られます。そういう答えでよろしゅうございますか。

質問者 もう一つだけ。

宇高 どうぞ。

質問者 先ほど、檀林の授業方法のことにちょっと興味があるのですが、要するに先に進んだ人があとの人を……。それは、つまり経験的なものなんですか、それともシステムとして何か決まっていたのでしょうか。

宇高 ある程度、システムだと思います。

質問者 どんな。例えば、つまり進み方というのは相対的な感じがするんですけれども、それをどういうふうに判断……。

宇高 さっき、ちょっと田中さんの質問に答えましたように、要するに、50人ぐらいの一字席とか、扇間とか、座る位置が決まってくるランクのものがあるのです。この体系とは別に。そういう人たちが指導に当たっているようです。それらのリーダーがさっき言ったように、学頭と言った時代と伴頭と言った時代と両方あるようなんですが、それ

が学問体系のリーダーだと。そういう形で指導をしてきた。ですから、さっきの言葉が、少し不十分なところがあれば、部が上がることを部転と言うのですが、部転が上に行ったから必ずしも指導係になったのではない。さらに、その中で一定のランクに到達した者でなければ、成績優秀な者でなければ指導者にならなくて、その指導の優秀な者が後に役者になっていき、役者になった者が有力寺院並びに檀林住職のコースがあったというふうになっています。

では、すみません。ちょっと、大変、途中でございますが、所定の時間のようでございますので。大変、乱暴なお話をさせていただきます。失礼をいたしました。以上で私の話を終わらせていただきます。(拍手)

—— 了 ——